

一京都三山の森林景観を守り続けるために一

古来より、日本人にとって自然は命の源であり、人々は自然と共生することにより、自然を敬い、心のよりどころとし、その恵みに感謝してきました。

京都は、1200年を超える歴史を積み重ねてきた歴史都市として、市街地の周囲を取り囲む三方の山々（東山、北山、西山の総称、以下「三山」といいます。）と共生してきた都市であり、三山の森林は、燃料などの供給源として、人々の暮らしとの密接な結びつきによって形づくられた里山林でした。

また、三山の森林景観は、「枕草子」をはじめとする多くの文学や絵画に取り上げられているように、日本の風景として歴史を刻み、日本文化とも密接に関わり合ってきました。

現在においても、市街地から望むことができる三山の森林景観は、京都の景観を特徴づける重要な要素であり、山ろく社寺の背景林、借景林となっている景観は、大径木の荘厳さを含む森の厳かさがあり、添景としてのモミジ・サクラとともに、日本文化の拠点都市 京都の「京都らしさ」を象徴する存在となっています。

森林を守るには、自然の営みに任せて手を加えないことが一番良いとの考えを持った人は多いのではないのでしょうか。確かに森林の生態系が自立している原生林（白神山地のような人の手がほとんど入っていない森林）においては、手を加えないことが自然を守ることにつながっています。

しかし、三山のように人のかかわりの中で形成されてきた森林に手が入らなくなると、一見、緑豊かなように見えますが、貧弱な樹木ばかりになったり、多様性の少ない特定の樹木が繁茂するなど、森林として不健全な状態に陥り、それらの多くは病んでしまうことになります。

古都京都のイメージの重要な構成要素である森林が、人々の知らない間に変化してしまい、治山治水機能が低下し、山腹崩壊などの危険が生じる前に、まちと共生する森林の再生に向け、さらには、木の文化を大切にするまちづくりに向け、三山の森林景観の望ましい方向性を明確にする必要があります。

「京都市三山森林景観保全・再生ガイドライン」（以下の章においては、「ガイドライン」といいます。）は、今日における市街地を取り巻く森林の様相が大きく変化していることを受け、市民やNPOなどとともに、森林に積極的にかかわっていくことが欠かせないという視点に立って作成したものです。